

私は女神と

茨田 凜

それから暫く風に吹かれて部屋に戻った。工場の敷地内にトラックが入り荷物の出し入れをしている。騒がしくて少し嫌になる。ロサから人に会うなと言われなくても、他人との接触というのが何だか考えられなくなってきた。ただ一人で本を読んでいる感じ。弾む声も入ってくる声もなく、自分の内側だけで言葉が攪拌される。

与えられないし殆ど動きもしないから、昼食は摂らなくなつた。空腹は応えるが気分はすこく楽だ。食物連鎖の輪を外れた気分になるのがいい。組み込まれるということ自体が、嫌いだから。そのため、生活の軸というものが昔と随分変わった。昔と今、どっちがどれだけ歪んでいたかと思う。今の方が正常だと思つ度、少し怖くなる。物より心を使うこと。これが本当に人間の何かと。こんな考えではきつと生きられない。力尽きる。恐怖感を覚えるのは、水色の目薬が乾いてきたせいだろう。本当は圧倒的な朝の美しさに負かされて、いつまでもこの生活の信者でいたいのに。女神でありたいのに。寝転び過ぎて背中が痛くなる。仰向けから体を横にして目を瞑つた。そのまま寝てしまつた。

久しぶりに寝て夢を見た。起きている時に妄想という形で見る夢は多くても、無意識に見る夢が私には少ない。心を映した夢が見られない。それは言葉にすると悲しかった。今日見たのは、幼い頃からよく見ていた夢。人に言つたら、何かのトラウマじゃないかと疑われそうな類のもの。自分の立つている地面が崩れていく夢だつた。足下の地面にヒビが入り、パキンと砕けてしまうのだ。けれどその後、地の中に落ちていくということはない。ただ地面が割れ、自分が真暗な宙にいるというシーンを何度も繰り返す。そこにある地面は本当に普通なものだ。白っぽく乾いた土に、僅かに生えている貧弱な草。周りに何も建っておらず誰もいないというところが異常ではある。だがそんなことはどうでもいい。不思議なのは、自分の姿がいつ見ても幼女であるということだ。長く真っ直ぐなおかつぱ頭、黒地に白い菊の花のワンピース。恐らく四歳頃。服は気に入っていたのが、この頃着ていた中で唯一記憶に残っているものだ。その姿で、何度も恐怖する。

本当に昔、小学校の低学年、もしかするともっと前から見ていた気がする夢。このせいで私は地面というものが、そこを歩くことが時々怖かつた。今では勿論ないが、そんな時期もあったのだ。人が歩いているのを見るのも、走っているのを見るのも嫌でたまらなかつた。幼少の私

「には、人が走った衝撃で地面が割れるように思ったのだ。これでは体育の授業や運動会が好きになれるはずもない自分が走っている時も人が走っている時も下ばかり向いていた。何も起こりそうにない地面をただ無言で見つめていた。決してなくなりはないものを。」

「こんなにも人の足というものには怯えたのに、地震というものは何故か恐れなかった。あれは全体が揺れているのであって、ガラスに石を投げ込んだみたいに割れはしない。そんな風にも思っていたのか。また写真などで真つ二つに割れた地表などを見ても怖くなかった。あれは単なる自然現象だと思えた。夢を見ることは続いても、日常に不必要な警戒心は徐々に薄れていく。私は人が走るのにも自分が走るのにも、無感動を持って接した。夢を見る間隔も随分長くなった。今日は一年半ぶりに見たらうか。」

「そう、めつたに見なくなつた夢。それでも私は深入りした。地面が割れる。世界が壊れる。自分が、根本からいなくなる。それは人の足によって。あの夢は、そうして全ての人々がいなくなつた世界なんだから。最後の一人が幼い私で、人間は世界を歩むことで、走ることで壊す。幼い頃、無意識にそう思っていたんだらうか。」

「昔は想像もつかなかつた今の時間、この重たい体で、私は幼い頃から見る夢を繰り返している。それでぐちゃぐちゃと考えている。ひどく滑稽に思えた。」

「目覚めると夕方だった。部屋の中が嫌に明るい。頬に畳の跡が付いていた。痛くて懐かしい。頬を傷つけたそれを撫でながら起き上がった。流しの銀色が夕日を照り返している。世界を歪めて映すそれは、天上の人が使う盆のようだった。丸く切り取られた四角の中でオレンジの光が虫のようには舞う。輪郭の濃い影が畳みの上で、あるがままに伸びていた。私はぼんやり座っている。今日も、一日が終わる。」

「ここに来てから太陽をよりありがたく感じていた。時計のない部屋で、太陽は朝と昼が終わってゆくのを簡潔に伝える。光に赤い色が付いてきたならもう夜だ、というような感じで、太陽が生きる指標になるのだと思つた。夜のために今日も生きていく。太陽はその一日のゴールまでの距離を示してくれる。そんな些細な優しさが押し付けでなくて好きだ。これが延々と続いていって、その数を数えながら老い死んでいく。そんな最期を迎えたい。一つ、二つ、三つ。夜空の星を数えるみたいにして、体に残つた命の欠片を見つめ続けられたらいい。」

「小屋の中での変態はこんな風に取り留めがない。生きることや死ぬこと。そんな重い話題。今日の天気や明日の天気。そんな軽い話題。口サについては何も触れなかったり、深く溺れたりする日もある。話し相手もない」

のに話題という言葉を選ぶのは、これが私の生活の中心だからであって、再び読み返せる物語でないと思うからだ。言葉というのは言った瞬間、今と一緒に流され過去に消えてしまふ。私達は生きていなければならず、それらの今を追いかけて過去の湖に辿り着いてはいけない。会話は水に、妄想は紙に似ている。会話は流れるところが、妄想はちり紙みたいにただ箱から取り出していところがそうだ。何をどんな風に行っている時でも、宙にばら撒いたり口にくわえたり、好きな風に遊べてくしゃくしゃ出来るもの。それはとても楽しいのだが、あまりに幼すぎて物足りない時がある。だから「話題」について「会話」してみたい。自分の頭の中でさえ一瞬にして過ぎ去ってしまう時間。ミント味の菓子の、鼻に抜ける香り。そんな刹那を愛したい。けれども大抵は妄想に甘んじてしまつて、楽しいだけで終わる。おもしろいかもしれない玩具を、捨てられてはたまらないと思つてからだ。使い捨てでありながらもゴミ箱の中に溜まつていく思考。強く思わなければ忘れてしまうような、掛け替えのないけれどそうではないもの。そればかり弄ぶのは小鳥の生活だ。一瞬脳に閃いた思いを口にして流せるのが女神だ。手直ししない言葉を人に伝えることの、どれだけ恐ろしいか。指先を震わせ、口先を震わせ、私は口サに語っている。

バラの色。口サと私の全て。稚拙さも無様さも、彼は

好いてくれるだろうか。

口サとともに食事をしたことはない。いつも食べているところを見られていた。いや、聞かれていた。この工場は夜でも人がいて機械を動かしている。だから彼らのための食堂もまた開いていた。口サはそこから私の夕食を買つてくる。広い工場の敷地内で大勢の人が働き、食べ、時には休むのだから。その外れでひっそりと毎日を送る私は、星からこの惑星を見ているような、そんな存在で、それ程に遠い気持ちがあった。一度夕方こっそりとバラを見た帰り、植え込みの影で工場から抜けていく人々の群れを目にしたことがある。彼らは一様に灰色の作業着姿で、違つ方向を向いていても同じ明かりの中にいた。彼らは光の中を進んでいた。私と同じ年頃の少女もいたように思う。似たような少女と仲良く話しながら道を歩いていた。距離がありすぎて私には彼女らの光る髪しか見えなかった。それでも少女だと思つたのは、歩き方にリズムがあつたから。その音と動きの中で立ち尽くしたことがあつたから。だから私は彼女らを少女だと思つたのだ。それはまるで天国みたいな光景で、彼らは許された人々のように見えた。何が許されたのかは私にも分からない。ただ夕靄の中、彼らは黒く淡い影になり消えていった。

「食欲が、ない?」

突然声を掛けられはつとした。急いで首を振ってから気が付いて、違う、と言ひ直した。こういう時は声が出ない。やっと出てきたのは低い声だった。私は箸を持って茶碗を持つて、そうして何もせずじつにいたようだった。「そう? でも君は、さっきから明らかに食べていないね。僕が入ってきて、テーブルにご飯を置いて、一口二口したら急にはたりと止んでしまって……心配したよ?」

「ごめんなさい。ちょっと、考えて、ぼんやりしてただけ。そうね、ごめんなさい。味噌汁が冷めちゃう。うん。このコロッケがとてもおいしい」

夢中で箸を動かす。ロサは黙っていた。私は俯き彼からの気を受け止めながらも、その重みを取り除きたくて食べ物次々口に運んだ。舌に染みるソースの味や、茹でたじゃが芋を奥歯で磨り潰す感触。掻っ込んだ白米が喉を伝つて胃に積もっていく。自分が作られているというのを心の隅で思った。ロサのもたらす食事が私の爪を伸ばし、血になり流れていく。細胞の一つ一つを作り直し私の体を覆っていく。それはこんな静かな時間に決定づけられていて、その間彼は黙つて私の咀嚼音を聞いている。

何が楽しいのか。何が嬉しいのか。私の食べているその横にいることに何の意味があるのか。こんなことに疑

問を持つてはいけない。今の私は神々しくも何ともないし、自ら箸を動かして物を食べる人間が小鳥であるはずもない。ロサにしては意外なことに、箸を使って私に食べさせるということはしなかった。期待していた訳ではないのだが、どこかこの食事という行為のみメルヘンの中で浮き立っている。コロッケ、味噌汁、キャベツの干切り。幻想的な生活の中でも、私はこれらの名前を決して忘れないのだ。そんなことがやけに白ける。

ロサが伸びをし畳の上に寝転がった。一日外仕事では疲れるのだろう。それは自然な動作だった。彼はくつろいでいた。けれど私はそのよつな気分には到底なれない。

ロサとの夜は辛い。ロサの言ひが好きなのは朝だけ。自分を忘れて女神になれる瞬間だけ。今私は息をしながら、その音を彼の耳がしっかりと聞いている。そのことだけでも辛い。

いつの間にかロサが喋り始めていた。

「アラムシ程嫌なものはないね。掴みにくくて、僕にはどこから出てくるのか分かりやしない。ところで、アブラムシは何色をしているんだい?」

「緑。植物の茎の色とほぼ同じ。だから遠くからは見え  
ない」

「なるほど。それじゃますます取りにくい」

言つて欠伸をし寝返りを打つ。私の方に背を向けている。こんな時に色のことを言い出すとは。まるで分から

ない。私は朝の神聖さを彼が破ったよつで少し腹立たしかったが黙っていた。ただ、彼もアブラムシのよつだとふと思つ。そう、小さな虫、決して私のことを上から見下ろしはしないが、腕に、首に、足に張り付いてくる。蛍光灯の下で見るロサにそんなイメージが重なった。どんな隙間からも入り込んで、私の白い皮膚に触り、息を吐かせる。交差した腕が絡んで首を締め付けるよつな錯覚に、背筋が冷たくなる。その敏感な耳に心臓の音まで聞かれそつな気がした。

彼はいつも私の傍にいます。私を最初から剥がして、全て知っている。それは怖いことよつで、私にこの頼もしい木の根本から、離れたいとは思わせない。辛くて、恐怖なのに、これなしにはどうしたつて生きていけないのだ。これをなくした自分が、想像の内のどこにもいない。

「ご馳走様でした」

「全部食べたみたいだね。よかった」

皿の載つたトレーを持ちロサが言った。その背中には荷物を背負つている。皿を食堂に戻したら、彼はもう帰つてしまつたのだ。ロサは夜ここで寝ない。私の前では意識を手放さない。夜の闇に自ら溶け、朝になつてはと現れる。

「おやすみ、女神。明日も極彩色の夢の中で会おう」

「ええ。おやすみなさい」

浮かれた台詞を残しロサは去つてゆく。アルミサツシは開かれ一瞬底なしの闇を切り取つたが、すぐに閉じられ銀色の光を再び反射した。彼の姿はもうない。私だけが残された。ああ、もつ何もない。嘆息する。座つたまま横に倒れて、畳の目に指を這わせた。体の重心が編み目に吸い込まれていくよつだった。私は干からびている。朝の雫はもつみんな乾いてしまつた。神聖さも漂つ静寂もなく、檻に放り込まれたみたいだ。何故こんなに疲れているのだろつ。何もしていないのに、眠い。体も心も全ては低速で動いたはずなのに、ずしりと重い。

暫く腕を投げ出しだらんとしていたが、決心しちやぶ台を片し、シャワーを浴び、布団を敷いて寝た。電気を消すと、工場の隅に取り残された小屋は完全な闇に落ちる。私は布団に潜り込んだ。

何も考えないよつにして早く寝た。夢つつの中、雨粒がトタン屋根を叩く音がした。その一音一音は小屋を包み込み、やがて大きな一つの雫になる。その中で丸くなり、幼子のように眠つた。雨音が身体を満たしていた。

それは嫉妬する色だった。見た瞬間に惹かれた。人を羨む感情に似ていた。

「水の中で死んで、でも決して朽ちはしないよつな……」  
それは緑がかった白。葉でくるまれた、もしくはその

緑を内蔵した真珠色。病的というよりはすでに死んだ肌の色。薄く重なつた奇。そんな風に見える。浅い沼の中、光を浴びて眠る体。

手で簡単に握り潰せる程小さな花を私は見つめていた。純白でないところがいい。浮き出た血管のような緑。張りのない瑞々しさを周囲に与えている。

「おもしろいね」

ロサが言った。私の頬に手を当てている。霧雨の降る朝だった。臉を濡らす雨粒が冷たく柔らかい。そのせいか彼の手が妙に熱く感じられた。私は彼の肩に凭れるようにして手が頬に当たるのを避ける。熱さが引き、ポロシャツの柔らかかな感触のみが額を押した。

「これはサマー・スノーと呼ばれる品種なんだ。なるほど、そうか、死人か。まだ生まれたての花なのにな。開きかけなのに」

確かにその花は全体に丸みを帯びていて、中心の雄蕊雌蕊を覗かせていなかった。生まれた瞬間が死者のよう。まだ花になりきれていない、葉から落ちた白緑。

「気に入ったの？ 女神」

ロサが私の髪を撫でる。何か言っている。聞こえたが言葉になり頭に映らない。少し体を起こす。彼の肩越しにその花しか目に入らない。

何でこんなにも惹かれるんだろう。サマー・スノー。子供でも分かる英語の名前。夏の雪。それはすぐ溶けて

しまつて、儂いから美しいのか。いや、違う。この花は溶けない。いつまでもここにいる。石膏細工のように白く硬く、形を保ち続けている。そうして緑の血を持っている。亡霊の花束。そう思った。

ロサが私をサマー・スノーの前に導いたのは一度きりだった。その次の日からは別の花。淡くも快活なピンクに黄が混じつたペネロプ。ハート型で飴のような照りを持つ花びらが、鞠のように丸まったラウブリッター。長く愛された絹のような白茶混じりのピンク色、濃厚な香りのオフィーリア。セプタードアイルは内側にいくほど濃いピンク色。濃厚な香りに波紋のようなリズムで広がった花びら。皿の上に載せてフォークで突きたいとロサが言っていた。を見た。マダムハーディやハーディ・カヴェルを再度訪れた日もあった。けれどもサマー・スノーは一度しかロサに愛を捧げられなかった。私はといて、あの日から通いつめている。

雨の日の針葉樹は美しい。ブラシのような葉が雪を纏い白かった。それは朝露に似ていた。私の目を乾かさないう。叩けば空に散る、脆い水晶のネックレス。それを手で落としながら歩いた。濡れたシャツの袖が腕に張り付

く。工場は今日も人氣がない。普段から出入りが少ない裏手の林なら誰にも見つからなかった。足元の雑草を撫でるように、通気口から漏れる煙が生暖かく漂っている。深い森の奥にでも迷い込んだ気分だ。今にも木の陰から小鹿が顔を覗かせそう。空想に一人笑う。木の匂いが体に染みこんでいた。

幾本自かの枝を叩く。バサツと水滴が一気に落ちてきて、その音の先にサマー・スノーがあった。私の心は躍る。あの、死人のような色。永遠の血の色。

本来フェンスに這わせる種のそれは、一人きりで少しだらない形をしていた。伸びた蔓が遠慮なく地面に触れて、花が零れるようだった。私は駆け寄り跪き、花の一つに触れる。その時、ようやく異変に気づいた。

最初は全然分からなかった。けれども自然とゆっくりそれに気づき、認め、穏やかな時間の後呆然とした。

そこにもう死人はいなかった。沼の底に沈めていたかった花。それが今や水面に浮き上がり透明な呼吸をしている。

私は手の中に様変わりしたそれを認めた。もう緑がかっていない。完璧な純白。目を瞬かせずにはいられなかった。何なのだろう。この快活な色は、中央で光るのも、黄色。蝶の羽を誘つ鮮やかな色。それはもう日の中で咲く花だった。夏の雪。溶けない花だからこそ美しい夏の白。儂くはないが石膏細工とはもつ呼べない。これは花

だ。硬くない、柔らかい。人々を笑ませる。冷たい表情など一度として向けられない花がそこにあった。ただ、その完璧さが私には鉄のようだ。

もつサマー・スノーに会いたくなかった。私が好きなのは花らしくない色だった。義務をまっとうしない雰囲気。花なのに虫を寄せ付けないイメージ。ロサもそんなところを好いていたろうか。それとも盲目だからそんなこと分らないか。そうではなさそうだ。彼なら触れただけで、花が開き色変わりしたことを認めるんじゃないだろうか。

自分と重ねるから愛着を持つのかと思った。それは違う気がする。確かに私は義務を果たしていない。幻想の中漂うのはたとえ求められたことであっても、自堕落な遊戯に過ぎない。私にはあれ程美しく青さめることは出来ないだろう。時間の流れの中でわざと踏みとどまって、死人のように美しい色を保っていた。そしてその閉ざした時を一気に開放させ、白く黄色く咲き誇る。ブーケを投げた瞬間の花嫁。自分の過去を見せもしないで。無様からは程遠い花だ。

私は真つ白い花を前に暫し佇んでいた。腕だけでなく体全体が濡れていく。私はふと思いたった投げやりな気持ちで花びらの一つを舐めてみた。噛み付くみたいなやり方だと思った。舐めてみると薄い花びらは滑らかさの欠片もない。細かく産毛の生えた花弁はねちねちとした

触感と、無味という味を舌に残した。こつちが噛み付かれたみたいだった。急に咳が込み上げ、私は花から唇を離し地面に唾を吐く。

これがロサのしていることなのだ。その後もこぼこぼと芝生の上に蹲り咳き込みながら思った。花は生き物なのだ。そうして彼はその生き物を愛し手懐けている。私には牙を剥くこの生き物を、そのことがひどく許せなかった。あの盲人は花に、風に、自然というものに、たとえ光を見ることが許されなかったとしても、どれだけの愛撫を受けていることだろう。それなのに私は。

そつだ、私は自然に拒絶されているのだ。だからあんな夢を見る。世界を壊したのは、きっと私以外の誰でもない。

梅雨が明ける前にサマー・スノーは溶けて消えた。それが血を失った後も、嫌悪していたのに私は通い続けた。何か偶然の作用で花が萎み元の色を取り戻したのなら、そつ思っていたのかもしれない。枯れたら、死んだら、あの色になるかもしれないと思った。けれど一度光を浴びた花は老いから逃れられない。サマー・スノーは何枚もの花びらを緩め、広げ、ますます大きな円を描こうとする。その度に花弁の先に茶が混じった。その茶はやがて花全体を侵蝕し、潤いは消えていく。あつという間だ

つた。白緑の子を持ち誇らしげだった木は、今や完全に茶色く腐りかけた荷をぶら下げるばかりである。しかしその顔は落胆していない。何もなかったかのように、葉は夏の近づきに合わせ濃さを増していった。

ロサは様々なバラを私に見せてくれる。けれども一番美しい瞬間しか見せない。私が見ていないところで彼を置き去りにし朽ちるバラがあるのだと、初めて知った。生きていく以上永遠を孕むことは出来ず、蕾になれば咲く運命から逃れることは出来ない。今という波をいつまでも避け続ける訳にはいかないのだ。花は見ることも叶わない次の季節に咲く子を案じて枯れ、たくさんの種子を残す。気掛かりで不安定な血の行く末、続けるために終わらせる自己犠牲。こんな考えが胸の内でもだかまる。ゆつくりと螺子を埋め込まれていくような、そんな気分がした。

冷めた思いは雨の音に任せザアザアと殺してゆく。最後のサマー・スノーが落ち、目的を失くした私は小屋にいた。窓の外、糸になり繋がる雨粒に集中し一体になるうとする。そつすることで自分が無で、それでいて途切れない音に満たされた存在になる。

こんな土砂降りの日も彼は仕事をしているのだろうか。今日は一人で自覚め、ロサには会っていない。考えれば壁に掛けてあった雨具がなくなっている。私は目を閉じた。その前髪は今、濡れているだろうか。無精髭は、脚

立の上に乗って、一人雨に耐えているのだろうか。雨粒が一滴、首筋を流れてロサの背を濡らす。身震いした。思わず足で畳を擦る。私は確かにここに居る。さっきの感覚はまるで自分がロサになったよつな。何とも言えないものだった。自分の背にも冷たさが感じられたのだ。何気なく、思い浮かべただけなのに。

何だか気が抜けて、ロサのいない部屋。膝を抱えて座り込み続けた。

その日、梅雨が終わった。

夏の夕焼けは冬よりも冷たい。夏の夕焼けは夜をこっそり両腕に持っている。ピンクと赤と青が生温い空気を追いかけてどこまでも横に伸びていく。薄い雲が白く光って、こおんと景色に響く音を鳴らした。

冬の夕焼けは緋色が強くて空気が乾いている。それが香ばしい匂いがして不思議な感覚だ。懐かしくなる。遠くて近いところからスープの匂い。目を細めたくなる衝動が睫に忍び寄ってくる。夏の夕焼けは甘くてざらついた匂い。溶けきれない砂糖水。それと大風の吹きそつな重い空気が夏にはある。でも匂いが甘くて、空の色が頬に染みこんでくるから、そんなもの蹴飛ばして浮かれ歩きたくなる。じんわりと湿った肌に夜風の吹くのが、どこか知らない世界に吸い込まれる途中みたいで好きだ。

胸が高鳴って、大きく腕を振って、でたらめな足取りでアスファルトを叩きたくなる。

小屋の窓を開け、こんなことを考えながら夕食を食べていた。木に囲まれたこの窓でも僅かだが空が見える。赤と青、対立する色同士が丁度いい具合に窓枠から覗く。白い雲が隅の方で光を放ち歪んでいた。

ロサはちゃぶ台を挟んで私の真向かい、いつもは寝転がったり後ろ手を突いたりしているのだが、今日は普通に座っていた。私のことを見ているのかもしれない。はつきりと分らないのは空ばかり見てご飯を食べているから。それと彼の体線を感じないから。夕べの空気に飲まれていたのだろうか。彼はいつもより穏やかだ。唐突に話し掛けたりしてこない。私にはそれが奇妙で落ち着かなかつた。袖を捲った腕に、風と一緒に興奮と好奇心とが触れてくる。肌の上を弾む。それを無視し箸を動かした。今食べているのは白米に豆腐とわかめの味噌汁。揚げ出し豆腐、茄子と大根のお浸し、白身魚の焼きもの。茄子のお浸しに歯が埋まっていくのを味わっている時、ロサが口を開いた。

「今日は」

じわり、と酸っぱくも辛くもない汁の味がした。少し甘いかもしれない。

「暑かったね。額と頬が焼けるようだった。君は？ 君は中にいたから分からなかったかな？」

「うっん。暑かった」

止めていた箸を再び動かす。今日も一日中小屋で過した。寝転がっているのに全然眠くならなくて、あまりの暑さに蒸し焼きになって死ぬ自分の姿ばかり思い浮かべた。暑いと食べ物がないのがやはり辛い。水が飲めるのが幸いだ。水なら水道から存分に飲める。けれど水ばかり飲んでいると自分が薄れていく気がした。血液が白み、骨が削られていくような気がするのだ。それでも昼食の催促はしない。太陽が天上まで上った時間に死んだものを食べるのが、何だかやるせなくて汚らわしくて下等で、彼に要求するということも嫌で耐えることにした。何で昔、昼食を損っていたのか分らない。光に晒され何もかもはつきり映し出されてしまう中、焼かれたものなど何で食べていたんだろう。笑いながら命の残骸を口に入れたりしたんだろう。考えすぎだとは思っ。でもこの生活の中では自分が本当に女神で、神聖で、そんなことばかり考えているのが当然に思える。

魚と白米の最後の一口を同時に咀嚼する。何を考えていようと、こつやつと箸を付けてしまえば、ご飯とおかずすぎない。風に吹かれた過去も、限らない青を泳いだ記憶も、私の胃の中で蘇りはしない。箸を下ろした。カチャリと音が立つ。

「こ馳走様でした」  
「ねえ」

手を合わせて言った瞬間にロサがちゃぶ台から身を乗り出してきた。私は少し仰け反る。

「今からバラを見に行かないかい？」

ああそれが言いたかったのかと思つた。沈黙の理由は彼の唇にある。緩みきっているけれども、口角がきゅつと上を向いている。子供のようじに、気色悪い程無邪気な唇。

「夜のバラ、見せてくれないか。今は人がいるからもう少し経つてから。この工場は静かで蒸し暑くて、今夜もきつといい」

「そうね」

そっけなく答えながらも、私は顔を緩めた。肌の上を弾む興奮と好奇心。夜風と混ざって、染みていく。

ロサの足音はいい。芝生の上を歩いていても聞こえそうだ。リズムがいいのだ。繋いだ手から何か伝わってくる気にさせる。ついていくのにはやっとな私の足音も、ロサの音に秩序立てられればまるで音楽のよつ。

「何ていう名前のバラなの？」

「さあ、何ていったら？」

外灯に照らされ白杖が光る。それが浮かれた夜に玩具めいて見えた。

「実はね、僕にも分からないのさ。バラは業者から買つ

のだけれど、その時おまけに貰ってね。くれた人も名前を知らなかったんだ」

話の途中で目的の場所に着いた。小屋があるのとは反対側の林。その近くのフェンスにそれはあった。直径は手をいっばい広げた時の、親指と小指の間ぐらい。大きな花だ。それが丈夫な葉を纏ってフェンスに凭れ掛かっている。

「このバラ、何色だい？」

ロサが耳元で囁いた。私の髪を梳いたり撫でたりもしている。

「暗くて、よく分からない」

そう答えた。夕方の気配はもう残っていない。辺りは闇に包まれ、虫の声と木のさざめきが空気を震わす。月のない夜だった。

「そっかい、じゃあ……」

ロサは私の髪から手を離し、木に跪く。花の一つは片手で触れ軽く口づけた。彼の顔の上で葉が揺れる。後ろから見ていた私は彼に近寄った。脇にしゃがみ込むと、ロサがすぐ気配を察し話し掛けてくる。

「ねえ、女神。夜の花を楽しむ方法、知っているかな？」

「知らないわ」

「そつだろつねえ」とロサは微笑み、胸ポケットから何か取り出した。煙草かと思ったがよく見ると違う。それよりはずっと小さな箱だ。茶色い側面に白い擦り傷。マ

ツチ箱だ。ロサはそれを軽く振る。ジャツジャツという賑やかな音がした。そつしてから一本取り出す。躊躇いなく擦った。瞬間、私は息を呑む。

「きれい」

突然に現れた美しい魂。ロサがマツチを持っていない方の手で私の頬に触れた。水気を持った冷たさに背筋が泡立ち、言葉が自然と口を突く。

「淡い、淡いオレンジ。ピンク色に近い、薄い花びらが照らされて、あ」

火が消えた。すかさずロサは二本目に火を点ける。再び明るくなった。火に照らされた彼の顔を盗み見ると、真面目な表情で少し驚いた。頬が硬く、唇が締まっている。今度は消えない内にと思い出し、急いで続けた。

「本当に滑らかな色。根元は黄色。桃みたいな、鳥の羽のような……」

また途中で火が消えた。再びロサがマツチを擦るつとす。ふと思ひ、私は彼の手を掴んだ。触れた部分からびくりと彼の背に何か走っていくのが伝わる。私もどきりとした。驚いたような怯えたような反応。初めてだった。ぼかんとして何も言えないでいると、彼は額に僅かな皺を寄せ、何だい、と聞いてきた。

「私にもやらせて」

ロサは、いいよ、と言って笑った。女神の望むままにと。それは悪戯めいた苦笑だった。マツチ箱を受け取る。

汗ばんだ手に乾いた箱が張り付く。マッチを擦るのは苦手だ。打ち付ければすぐ折れてしまいそうで、どうしても思い切れない。五回目に擦った時、ようやく火が点いた。

「きれい」

さっきと同じようにしか咳けない。本当にそれしか浮かばない。朝や昼に見るのとはまた違う美しさ。朝と昼は全てが明るくて、美しさが光に溶け込みに充滿する。夜は違った。小さな火の中に鮮やかな色が閉じ込められ、濃縮されている。ポールズ・ヒマラヤン・ムスクスを見た時もそうだった。街灯の白い光に照らされた空間だけ切り取られる。透明な箱に入っているみたいだった。ロサの声は真空管。そんなことも思い出しながら言葉を探す。

「小さな音のするオルゴール」

そう表現した時にはもう火が消えていた。煙の白と匂いとが黒に映えていた。ふふ、とロサの笑う声がする。

「それは火のせいかい？」

「ええ」

きちんと返事が出来た。朝でもないのに神聖な気持ちだった。生まれたての、死にたての光がそうさせるのだろうか。

「火の金色が一層花を輝かせる。魂みたいに。花が燃えているみたい」

大振りの花は天を向いて息づいていた。もつマッチは擦らずに幻の中で描写する。ああ、本当にあの花は輝いていた。名前もない花。夜に魔法をかけられている。私も花に触れてみた。消えてしまいそうな程に薄い。闇の中確かめるように慎重にその端を握る。

「ありがとう、女神」

ロサが言った。私は手を離す。反動で花が弾みを持つて揺れる。その時ふと気づいた。

「ロサが私に触れていない。」

「僕に光は見えない。けど温みを感じられるよ。そうか、花が燃えているのか。触っても冷たいから分からなかった。そうか、燃えているのか」

地面に置いていた白杖を手に取り彼が立ち上がる。私はそれをぼんやりと見やっつてから後についていった。

「ロサが私に触れていなかった。いつからだろう。そうだ、確か私がマッチを持った時からロサはただ横から見ていた。彼が小屋から出て行くと一人だけの夜が始まる。何故、彼が私に触れなかったのか、そのことはかり考えていた。」

夜にバラを見ることが癖になっていった。夕食を食べ終えるとロサが私に擦り寄ってくる。行こうと耳元で囁く。それは朝、夢心地な脳の中に吸い込まれる時とは違

って、生暖かさも汗の匂いも全てをろ過しないで含んでいた。一步どころか二歩も踏み込んでしまいたくなるような、甘い甘い泥沼。朝の女神が彼の欲望を受け入れているというのなら、夜の女神はそれを飲み込んでいっている。包むのではない。肌の上を滑らすという訳でもない。彼の欲望を自分のそれに注いで豊富な頬で笑ってみせる。言葉を選ぶ慎重さなんて忘れ果て、思いついたままを口にしてしまう。夏の暑さが私にまで汗をかかせるから、気分はより昂揚する。まだ頬に触れられてもいないのに彼に抱きついたりした時もあった。闇が私を大胆にさせ怯えさせる。昂揚と一寸先も見えない不安が、私に彼を抱いた時の確かな質感を求めさせるのだ。あのですつしりした温み。ポロシャツの皺が肌に付ける跡。それが欲しくてたまらない。

煌々と黒の中燃える紅は私を焦らせる。ロサが夜にバラを求めるその訳は、もう十分過ぎる程分かつているのだ。皮膚を潤す清涼さ。髪をくすぐる柔らかさ。流れる声とともに始まっていく一日。それが今や殆ど無い。彼は朝来なくなつた。私は昼を過ぎた頃によつやく覚醒する。そして壁に掛けられた熊手やら枝切り鋏やらがなくなつていくことで、ロサの存在を確認するのだ。私はもう外に一步も出られなかつた。太陽に目が眩み、立つていられない。明らかに体調を崩していた。自分の体が重いのはひとえに精神のためだと実感する。足も腕も、自

分のものではないみたいに細く白い。また気持ちとして外に行きたくなかつた。外に出よう、ロサに会つてみよう。そう思う度に気分が重くなり、胸の辺りに何かが詰まる。それは霧のように茫洋で捉えどころがなく、しかし真正銘の苦しみだつた。

甘い匂いを欲し続けた体は、今やその毒氣に犯され蝕まれていく。ほんの些細な一人遊びでさえ出来ない。畳の上にへばり付いて生活の苦痛ばかり思つた。自分はとも馬鹿だとも同時に思う。本当は知っていたのに。こんな生活、長続きするはずがないと。音を上げるのにその時間は掛からないと。私が疲れ果てるか、ロサが飽きるか、そのどちらかがあればこの城は簡単に崩れてしまう。私とロサが本当に一つになって、たとえこのメルヘンを永遠に守ろうと誓つたとしても、第三者に見つかればたちまち砕け散る。脆い鎖に歪んだ鉄格子ではいつまでも小鳥を飼つておけない。移ろう気持ちと一人だけの肌では女神はとどまっていられない。

今日は小さな窓も扉も全部閉め切つていた。あまりの暑さに今度こそ死ぬんじゃないかと思つた。誰も見ていないのいいことに、シャツのボタンを全部外していた。こつまでして窓を開けないのは外の音が鬱陶しいからだ。金属音が最近やけに響く。耳だけでなく舌の先まで痺れる。こつなつたのは勿論上場のせいではない。騒音は以前とそれ程変わっていないはずだ。狂つたのは私の頭。

蝕まれていく組織に、脳まで加わったのである。

吐き気やら目眩やらで辛くて、それなのに体が重いら水を飲む気も起きない。黙って、嗚咽を漏らすように口を歪め泣いた。瘦せた頬に骨が痛い気がした。仰向けに寝て泣いているので気管が乾く。咳き込んだ。俯せになつて呼吸を整える。けほりけほりと、決して大きくはない音が小屋の中に響くだけだった。そのまま空気に溶けそうな音だと思つた。

私は涙を引き続き流す。あの時には流れなかつた涙を。そう、ようやく流せたのだ。肉体と精神との両方にくるこの圧倒的な苦しみに寄り掛かつて、ようやく。

もつ、ここにはいられない。実感した。引き千切られるような痛みが喉に走つていった。

一度落ちた果実を元に戻すことは出来ない。一度落ちれば再び木の温もりに抱かれることは叶わない。たつた一陣の風が別れを告げるように、私がここを離れたきつかけもまた単純だった。

辛い日々の中、またしても私は白緑の花に惚れた。しかもそれはやはりまだ蕾だった。ああ、何故こうも未成熟なものにばかり惚れるのだろう。柔い肌、震える葉、堂々としていない姿こそロサでなく私が独占したい。見初めたのは小屋への帰り道だった。工場の裏手、辛

うじて外灯の光が届く場所にそれはあつた。通気口を覆う柵にその花は絡み付いていたのだ。遠目に少し気色悪く、それでも彼らは愛らしい。

そう、それは妖精の卵。夜風にゆら揺れる花の蕾を私はこう解釈した。一つの株に群生する花。海の生き物のようだと思つた。びっしりと虹色の岩を覆う卵。葉や蔭が呼吸をする度に、卵がほわんと揺れている。真ん丸の白緑の蕾。目の前の空気がうねる。その花に恍惚し突然立ち止まった私に、ロサが声を掛けた。

「何をしているんだい？」

「これ、この花、何？」

私はロサの腕を引つ張りその花の前に連れ出した。そして彼を無理矢理座らせ花に触れさせる。最初は戸惑っていた彼だが、触れた瞬間にやりとし、

「これはクレマチス。なるほど。君はまた……」

と言いつけ声をあげ笑つた。低く明瞭な響きが耳につく。真空管とは違つ響き。その声は痛みを残さずに闇夜を切り裂いた。

蕾の時、妖精の卵と表した形から、均等なバランスの丸い花弁を想像したのだ。けれども想像は常に裏切られるために存在する。あれから三日後の夜サマー・スノーの時と同じことが繰り返された。ロサと一緒にであること

を除けば殆ど同じといえた。

クレマチスは花開いた。それは細長いダイヤ形。紙のよつな白。少し皺寄った薄い花びらだった。想像は見事に裏切られ、私は花の前にへたりこむ。通気口の脇、口サは工場の壁に寄り掛かり座っていた。口元を歌っているみたいに緩めている。私の絶望を知ってか知らずか微笑んでいる。彼はそのままの表情でクレマチスに手を伸ばし、その花を一つ摘み取った。何の迷いもなく口に入れる。私はその動作をただ見守っていた。

「不味い」

彼が言った。私は目を瞬く。もう一度言つかと思えば彼の横に腰掛けた。体育座りした尻に芝生が柔らかい。私は口サが音をたてて咀嚼するのを見ながら、次の言葉を待った。

「排気くさい」

言い捨て、地面に唾を吐く。私は啞然とした。口サが花の汁を吐いた。侮辱の言葉とともに。バラでないといえ彼は拒絶したのだ。そこには何の真剣さもなくて、ただ薄い笑みだけが浮かんでいた。定まりきらない心を抱えて、私は膝を掻き寄せた。口サの吐いた唾が外灯に照らされている。凝視した。それは水晶でも真珠でもない。普通に人間の喉から出る液体だった。綺麗でも何でもなかった。透明な苦い粘液。それは彼の人体から飛び散った。

何故だろう。あまりに汚い瞬間で、全ての幻惑が打ち砕かれてもよいと思える光景なのに、愛しい。口サが愛しい。私はそつと中指で彼の肘に触れる。尖っていて、けれども温もりのある彼の肘。ざらついた肌の中に、温かいものが流れている。私はゆっくり指を滑らせその突起を手の平で覆った。それから私の体の方に引き込んでゆく。彼の腕は何の抵抗もなく私の腕に抱かれた。暫くそのままだった。口サも私も何も言わなかった。

溶けるよつな熱さも、身体を流れる電流のような痛みも、ここにはない。ただ、とても満足していた。私はこの美しすぎる工場に来てからの日々を回想する。作られた緑とそれを支配するコンクリートの灰色。無関心な人々。音のない世界で彼と囲んだ色とりどりのバラ。口サ。角張ったこの箱庭で薄ら笑いをしている男。人間になりたがらない目隠しの道化。そして私。女神と呼ばれた偶像。怠惰でいい加減で果てしなく嫌らしい女。薄い光と風がこの場所を支配していた。通気口のファンが生暖かい風を回し、いつでも私達の足に絡み付かせた。

このまま朝が来て欲しいと思った。でもそれは出来ない。ここで明日を迎えたら、私は永遠にここにいたくなってしまう。ここを、彼を愛してしまつ。茫洋な空気に包まれた、バラしか愛せぬこの男を。私は本物の女神になつて、嘘のない仮面で彼に慈愛を捧ぐ。でも、そんなことは、そんなことはしていけないのだ。

ロサの腕が一度むす痒そつに揺れた。それが合図だった。私は腕を放し立ち上がる。何でもないように歩いた。出口の方へ。ここへの未練などまるでないかのよつに。振り返りたいとも思わなかった。

歩いていく。背中後ろに全て流して。風景が見えなくなるような錯覚だった。そういえば足に靴を履いている。ああ、私にはやはり、やはりこれでよかった。

外灯がアスファルトを光らせ真つさらにする。その照り返しを避けるよつ、顔の前に腕を掲げた。そのままの姿勢で走り出す。

門を抜けた。

私は世界に飛び込んでゆく。